

二度と会えないなんて

悔しいし、情けないよ。
自分の親を自分の手で捜せ
なかつたんだから。この思
いは一生背負っていくよ。

3・11から4年

鎮魂の祈り

南相馬市小高区井田川の宮口公一さん(57)は、無念さを抱えながら4年の歳月を過ごしてきました。避難先の同市原町区の仮設住宅に並ぶ父貝治さん(75)と母キクさん(76)の遺影。写真の中の2人は、生前と同じように仲むつまじく寄り添っている。

(東日本大震災があった)
あの日の朝は、いつもよう

に仕事に出掛けたんだ。
「行ってきます」って言う
と、母が「気を付けて行つ
てらっしゃい」って。二度
と会えないなんて、想像も
しなかつたよ。

最後の会話は今でも覚えてい
る。貝治さんは温厚で人当たり
が良く、宮口さんは怒られた記

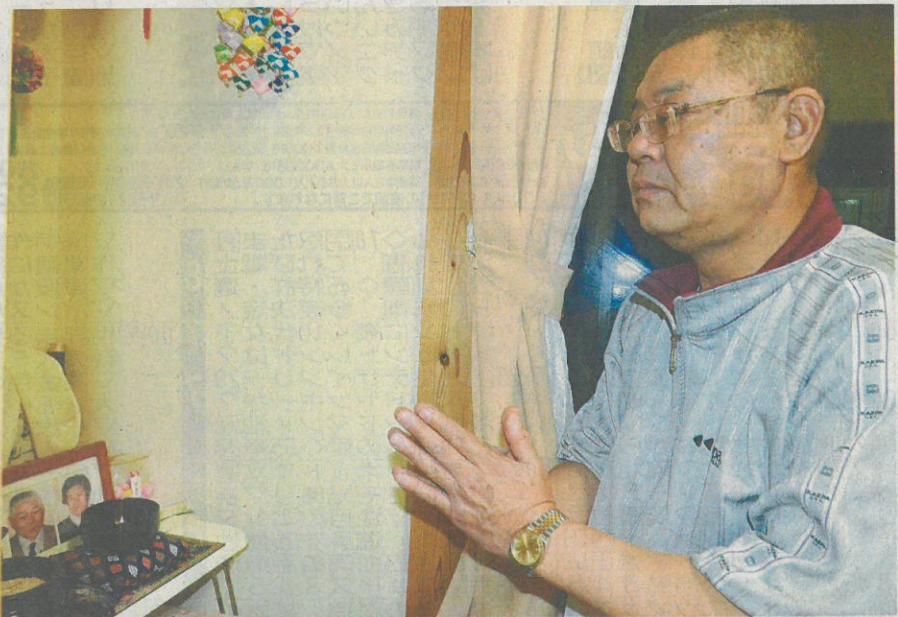
南相馬・小高で両親を亡くした宮口さん



貝治さん(左)とキクさん

憶がない。その分、キクさんに
は大人になってからも服装など
を注意された。仕事を終えた宮
口さんが自宅近くの避難所に駆
け付けたのは、震災翌日の午前

2時ごろ。そこに両親の姿はな
かつた。近所の知り合いから2
人が避難しなかつたことを聞
き、希望はしぼんだ。両親は全
壊した自宅ごと津波で流された
と考えている。



避難先の仮設住宅で、両親の遺影に手を合わせる宮口さん。
自分の手で遺体を捜せなかったことを今でも悔いる
=南相馬市原町区の仮設住宅

から離れなかつた。でも、
原発事故で小高に入れなくなつた。遺体安置所に何度も
通つたよ。

今も遺影に手を合わせる度、
自分で両親を見つけられなかつ
たことをわびている。

(谷口隆治)

約1カ月間、避難で県内外を
転々とした。南相馬市に戻つた
2011(平成23)年4月から
毎日のように遺体の安置所に通
い、両親を捜した。

同6月にDNA鑑定の結果か
ら、両親の身元が特定された。
しかし、時は待つてくれなかつ
た。既に2人の亡きがらは焼か
れ、遺骨になつていた。両親の
最期をみとれなかつた悔しさを
何度ぶつけても、国と東京電力
からは、いまだに謝罪がない。
そのことが、余計に悔しい。

もうすぐ市内の高台に自
宅を新築する。納骨は、そ
れから。新しい家を両親に
と、あまりに申し訳ない。

